

A TREASURY OF WORLD LITERATURE

新集 世界の文学

40

フォースター

天使も踏むを恐れ
ハワーズ・エンド

荒 正人訳
小 池 滋訳

中央公論社

スタインベック

訳者 尾上 政次

The illustrations were drawn by Thomas Hart Benton for the editions of *The Grapes of Wrath* issued by The Limited Editions Club and The Heritage Club, New York: copyright © 1939, 1967 by The George Macy Companies, Inc., and used with their permission. The reproductions are reduced in size (app. to three-fourths), and in the original Macy editions they were printed in two colors.

昭和46年8月25日初版印刷

昭和46年9月5日初版発行

発行者 山 越 豊

本文整版印刷 三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷 求竜堂印刷株式会社
口絵印刷 凸版印刷株式会社
本文用紙 三菱製紙株式会社
クロス 日本クロス工業株式会社
函ボール 佐賀板紙株式会社
製函 加藤製函印刷株式会社
製本 小泉製本株式会社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代) 振替東京34

目次

怒りのぶどう

解説

年譜

3

571

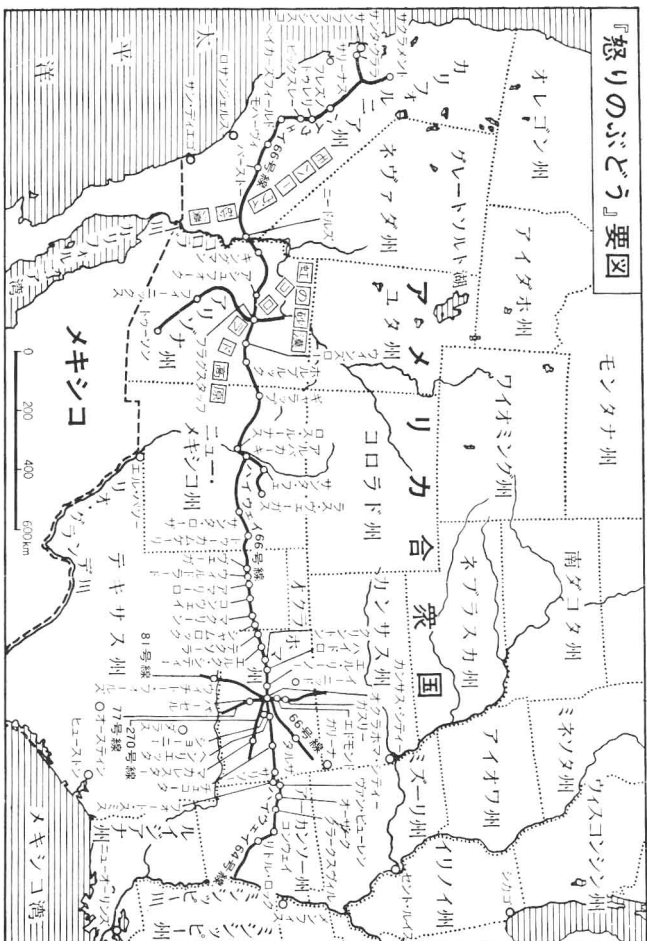
592

怒りのぶどう

この本を望んだ
キャロルに

これを身をもって生きた
トムに

モントナ州



オクラホマのこげ茶地帯一帯と灰色地帯の一部にかけて、降りおさめの雨がしとしとと何度かやってきたが、傷だらけの大地に切り傷を負わせはしなかった。かつてのささやかな流れの跡を、鋤が縦横無尽に幾回も横断した。降りおさめの雨はとうもろこしを急速に元気づかせ、道の両端沿いに雑草の集落や芝生を黙々と撒き散らし、はては灰色地帯もこげ茶地帯も、一枚の緑の敷物の下に姿を消し始めた。五月も末ごろになると空は淡々しい色合いにかわり、春にはあんなに長い間、空高くちぎれちぎれにかかっていた雲も、どこへやら消え失せていた。太陽は生長していくとうもろこしを来る日も来る日も容赦なく照らしつづけ、銃剣を思わせる一枚一枚の緑の葉の縁には、褐色の条がすーっと糸をひき始める。雲があらわれては消え、あらわれては消えするが、そのうちにそんな営みもはや見せようとしなくなってくる。雑草は自己防衛のために暗緑色にかわり、もうそれ以上広がるうとはしない。地上にはかさかさの殻が、堅い薄い殻

ができ、空が淡い色合いに変わるにつれて、大地も同じ淡さに——こげ茶地帯ではピンクに、灰色地帯では白く——変化していくのであった。

雨水にえぐりとられた涸れ谷では、土が土ぼこりの渦をいくつも巻き上げながら、こきざみに流れ落ちる。地鼠おとこねと蟻あき地獄が小さな土崩れを次々と起こしていく。そして来る日も来る日も激しい日ざしが直射をあびせかけるにつれて、若々しいとうもろこしの葉はもとの堅さと直立性を失いはじめる。——最初は弓なりに曲がっているだけであるが、ささえの中央葉脈が弱まるにつれて、葉っぱそのものも、一枚一枚と次第に下へ傾いていく。と思ううちに、はや六月で、太陽はますます強烈に照りつけてき、とうもろこしの葉の例の褐色の条はその幅を増し、中央葉脈のほうへずんずん侵入しはじめる。雑草どもはすり切れはてた姿を見せ、じりじり根の方向へ後退する。大気は希薄で、空もいよいよ淡々しさを加える一方だし、大地もまた日を追ってその淡々しさを増していくばかりである。

何頭立てもの耕作馬が行き来し、車輪が地面をこねまわし、馬どものひづめが地表をたたきつける道では、かわききった表皮の殻がくだけて、土ぼこりが作られる。動くものはどれもこれも判で押したように、土ぼこりを空に舞いあげた——歩いている人間は腰の高さまで希薄

なほこりの層を蹴立てるし、荷車は柵^{さくかこ}開いのてっぺんまでも舞いあげる。そして自動車にいたっては、雲みたいなやつをうしろにわき立たせるのだ。土ぼこりがふたたびおさまるには長い間かかるのである。

六月もなかなば過ぎると、大きな雲がいくつもテキサス州やメキシコ湾から上がってくる。天を突く重苦しげな雲、雨雲である。野良仕事の男たちは雲を見上げ、しきりに鼻を鳴らしながらそのにおいを嗅いでみ、風向きを知ろうと睡で濡らした指を空に向かってさし上げる。馬どもにしても、雲が頭上にある間は落ち着かない。雨雲はばらばらとほんの申しわけばかり落としてくれたかと思うと、どこかよその土地に急^{いそ}がしげに去ってしまう。

そのあとには空が相もかわらぬ淡々しさに光り、太陽が同じはげしさでもえたつのである。土ぼこりの中、雨のしずくが落ちた所には、しずくの噴火口が点々と見えるし、とうもろこしには清潔なとぼちちりがいくつもついている。だが、ただそれだけであつた。

雨雲の後を追うようにそよ風がやってきて、雲をさらに北方に追いやった。かわきかけたとうもろこしをかすかにそよがせる風であつた。一日が過ぎて、風勢は強くなったが、合間に突風をまじえることもなく、着実に吹き続けた。道からの土ぼこりは、柔毛^{じようもう}のようにふんわり舞い立ち、ひろがっていき、畑のそばの草むらに落ちか

かり、最後には少しはなれた畑の中へと落ちこんだ。すでに風勢はかなりはげしくなり、とうもろこし畑の雨を受けた土の殻に働きかけ始めていた。空はまじりこんでくる土ぼこりのためにわずかず暗くなっていき、風は大地一面をまざぐって、土ぼこりを吹き上げ、遠くまで運んでいく。風はますます激しくなった。雨を受けた土の殻はくだけ、土ぼこりが畑から舞い上がって、いくつもの灰色の羽毛状のかたまりを、まるでのろのろ立ちのぼる煙のように、大気の中に突き上げていく。とうもろこしがからざおのように風を叩き、ザッザッザと狂ったような音をたてる。もうここまできると、ごくこまかい土ぼこりは地面にはもどってこず、刻々と暗さを増していく空の中に消えてしまう。

風勢はいよいよ増し、石の下にまで勢いよくもぐりこみ、藁^{わら}くずや枯葉を、時には土くれさえも、舞い上げていくので、畑を通過する風のコースが、それではっきり示される。空は一面に暗やみわたり、それを透かして太陽が真赤にかがやくのが見え、空気にはぞっとするような肌寒さがあつた。夜になると風はいっそう猛烈な勢いで地上を駆け通り、抜け目なくとうもろこしの微細な幼根の間を掘ってはいり、これに對してとうもろこしは弱まった葉の力のありつたけをあげて防戦するが、やがてはその根という根は、こじ上げてくる風の力に宙に浮い

てしまい、どの茎もこうなればぐったりと横向きに地面に向かつて倒れこみ、風の方向を指すのである。

夜明けがおとずれてきたが、昼はついに来なかった。

灰色の空には赤い太陽が現われた——たそがれのように薄明りを投げかける、鈍い、赤い輪だった。そしてその日も過ぎていくにつれて、そのたそがれもいつしか暗闇にもどっていて、風が倒れ伏したとうもろこしの上をむせび泣きながら吹きすぎるのだった。

男も女も家の中で寄りそい合い、外に出かける時は鼻にハンカチをかぶせ、目をいためないようにと塵よけめがねをかけた。

夜が再びおとずれてきたとき、それは暗黒の夜であった。星の光も土ぼこりを透かしては地上にとどかず、窓の明りも庭先以上はひろがれなかったからだ。今や土ぼこりは満遍なく大気を混合して、いわば土ぼこりと空気の製の乳剤となった。家々の戸は厳重に閉じられ、戸や窓の縁には布ぎれが詰めこまれたものの、空気中では見えぬくらいの微細なほこりとなってそれがはいりこみ、椅子、テーブルの上に、いや、料理皿の上にまで、まるで花粉のようにたまってくるのである。人々はそれを肩まわりからも払いのけるのだった。戸の敷居にはきまってほこりの小さな糸がついていた。

真夜中ごろに風が通りすぎて、そのあと、あたりはひ

っそりとなった。ほこりをびっしりはらんだ空気は、霧以上に完全に、物音をおしころしてしまふ。ベッドで寝ていた人々は、風がびたり止むのを聞いた。烈風が吹き去った時、目が覚めたのである。黙って横たわったまま、静寂の奥深くまで聴き入っているのである。そのうちに雄鶏が次々にときをつげるが、それはどれもこれもおしころされたような声で、人々は寢床の中で輾転しながら、朝のくるのを待ちこがれるのだ。土ぼこりが大気の中からきれいに沈んで消えるまでには久しくかかることは、よくわかっていたのだ。翌朝になっても、土ぼこりはあたりに霧のように立ちこめ、太陽は豊満な新しい血を思わせる赤さであった。その日一日じゅう、空からは土ぼこりが驟雨のようにしとしと降りつづけ、翌日も同じであった。大地は一枚の毛布に満遍なしにはばてまでおわれたかに見えた。ほこりはとうもろこしの上にも、柵囲いの杭の上にも、さらにまた金網の針金の上にもつもった。屋根の上にもつもったし、雑草や木々をばおおい尽くした。

人々は家の中から出て、熱い刺すような空気を嗅ぎ、急いで鼻をおおった。次には子供たちが出てきたが、驟雨の去った後のように、走りまわったり叫んだりしなかった。男たちははいめいの柵囲いのそばに立って、めちやめちやになったとうもろこしをながめている。今で

はどんどん枯れ始めていて、ただわずかばかりの緑が土ぼこりの膜から透いて見える。男たちはおし黙っていて、あまり動こうとはしない。女たちも出てきて、めいめいの夫のそばに立っている——今度こそ夫の元気がくずおれてしまいかとさぐりを入れるためであった。彼女らは夫の顔をこっそり観察しているのだ。ほかのものが残っているかぎり、とうもろこしぐらいだめになっても我慢できるからだ。子供たちは近くにつつ立ちながら、素足の指で土ぼこりの中に絵をかいていて、父や母の元気がくじてしまいはしないかと、時おりさぐりを入れてよこすのである。子供たちは父母の顔をちらりとうかがってから、今度は丹念に足指で線を描いていた。馬どもが水桶にやってきて、水面に鼻づらをこすりつけながら表面のほこりを押しのけた。しばらくたつと、ながめている男たちの顔は次第に先ほどの呆然とした当惑の色を失って、きつい、腹立たしげな、反抗の表情にかわった。この時はじめて女たちは、自分たちが助かったこと、元気のくずおれる恐れが全くなかったことを知った。そうして彼女らはたずねる。「あたしたちどうすりやいいの？」男たちは答える。「わからねえ」しかし、それで大丈夫であった。女たちにはそれで大丈夫なことがわかっていたし、見まもっている子供たちにも、大丈夫なことがわかっていて、女も子供も心の奥底深く、もし男さ

え傷つかなければ、どんな不幸だって堪えきれぬものはないという、強い確信があった。女たちは家の中にもどって仕事にかかり、子供たちも遊び始めたが、最初はおずおずとであった。その日が過ぎていくにつれて太陽は前ほど赤くなくなり、もえたつ光を土ぼこりに敷きつめつくされた地上にあげせかけた。男たちはめいめいの家の戸口にすわっていた——その手はせかせかと棒ぎれや小石をいじくっていた。考えながら——計画をめぐらせながら——じつとすわっていたのである。

二

一台の真赤な大型運送トラックが、小さな路傍スナックの前に横づけになっていた。垂直に突き出た排気管は、小さくつぶやくような音をたてており、ほとんど目に見えぬもやみたいはがね色の煙が、その口の上にただよっていた。それはびかびか光る赤塗りの新品トラックで、両方の横腹には十二インチ大の字で、「オクラホマ・シティー運送会社」とでかでか書いてあった。二重タイヤも新しく、大きな後部ドアについた掛け金からは、真鍮なんきんじゅうの南京錠がピンとび出していた。網戸づきのスナックの内ではラジオが鳴っていた——静かなダンス音楽を、だれも聞く人がない時によくするように、小さくしぼってあったのである。小さな換気扇が入口の上の丸穴の中で

音もなく回転し、蠅どもが羽音高く戸口や窓のへんをせっかちらしく飛びまわっては、さかんに網戸にぶつつかっていた。内側では、一人の男が——例のトラックの運転手である——台の上に腰かけ、カウンターに両肘をついたまま、自分のコーヒー越しに、瘦せっぽちでさびしげなウエイトレスを見まもっていた。男は路傍スナックばやりの、小生意気でものうげな口つきで、女に話していた。「やつに三ヵ月ほど前会ったんだ。手術したとかいってたね。何か切っちゃったんだが、何だかは忘れた」すると女——「あたしだってあの人に会ったの、まだ一週間にもならないみたいだわ。調子よさそうだったわ。酔っぱらってないときはいい人なんだけどね」ときどき蠅が網戸のところこゝろで小さな唸り音をたてた。コーヒー沸かしが湯気をバツと吹き出すと、ウエイトレスは、ふり向きもせずに、後ろ手にスイッチを切った。

外では、ハイウェイの縁沿いに歩いてきていた男が、道を横切って、トラックに近づいてきた。ゆっくりと車の正面にまわってから、びかびかのフェンダーに片手をつきながら、風防ガラスの「便乗おことわり」のはり札をながめた。一瞬、男はそのまま先に歩きつづけようとしなかったが、やはり思いなおしたのか、スナックとは反対側の車のステップに、どっかり腰を下ろした。どう見てもまだ三十を越えてはいない男であった。ひとみは

極度の暗褐色で、眼球そのものにも褐色らしいものがわずかに見える。ほお骨が高く張っていて、太く深いしわが両ほおに走り、口のそばでは曲線をえがいている。上唇は長かったが、出っ歯だったので、歯をかくそうとして、両唇とも伸び切っていた。男はいつも口をとじていたからである。手は硬く、太い指と、小さなはまぐり貝みたい貝に厚くて、うねのついた爪があった。親指と人さし指と親指のつけ根のふくらみと——この三つにかこまれたあたりは、たこのためにてかてか光っていた。

男の服装は新品づくめであった——何から何まで新品で安物だった。鼠色の鳥打帽ときたら完全な新品だったので、ひさはまだピンと張ったままだし、ボタンもまだとれてはおらず、鳥打帽の持っているさまざまな用途——手さげ袋、タオル、ハンカチの代用——をしばらく前から果たしている場合みたいみに、形がくずれたり、ふくらんだりふくらみは少しもしていなかった。服は安っぽい鼠色の固地かたじだったが、これも全くの新品だったので、ズボンにはきれいに折り目がついていた。紺のシャンブレー織ワイシャツも詰物のためにピンと張り、すべすべしていた。上着は大きすぎ、ズボンは短すぎた。男はのっぽだったからである。上着の肩山は腕のほうに垂れさがっていたが、それでも袖はつんつるてんだし、上着の前は腹のあたりでしまりなくばたついていた。新品の赤靴をは

いていたが、それは通称「軍隊底」とよばれているやつで、一面に鋳^ぎをうってあり、かかとの縁まわりがすりへらぬよう、蹄鉄^{ていてつ}みたいな半円形の金具がうちこんであった。ところでこの男は車のステップに腰を下ろすと、さっそく帽子をぬいで、それで顔をバツとふいた。次にそれをひっかぶったかと思うと、ひさしをぐいぐい引っぱって、これからの破壊作業の皮切りをやり始めた。その次には自分の足もとに気がついた。前かがみになって靴紐をほどいてしまったが、その先は二度とは結ばなかった。頭の上ではディーゼル・エンジンの排気管が、忙しげにバツバツと紫煙をはきながら、かわいい音をたてていた。

スナックではもう音楽がやんで、男の声がスピーカーから聞こえ始めたが、ウェイトレスはスイッチを切りはしなかった。音楽が終わったことに気がつかなかったのだ。探検好きなその指は、耳の下に吹き出物を一つ見つけ出していた。トラックの運転手に気づかれずに、カウターのうしろの鏡で何とかそれを見ようとつとめていた。だから、ほつれ毛をなおしているふりをしていたのである。運転手が言った。「ジョーニー（オクラホマ州中部の町）でかいダンス・パーティーがあつたってな。どこかのやつが殺されたとかいう話だが、おめえ何か聞かねえかい？」「ううん」とウェイトレスは言つて、耳の下の吹

き出物をさも大事そうにいじくっている。

外では、腰を下ろしていた男が立ち上がつて、トラックのボンネット越しに一瞬、スナックのほうをじつと見つめた。それからまたステップにすわりこむと、脇ポケットからタバコ一袋と巻紙一綴りを取り出した。ゆっくりとていねいにタバコを巻き終わると、ためつすがめつながめ、最後には皺^{しわ}をのぼした。それからやつとそれに火をつけ、燃えているマツチを足もとの土ぼこりの中につつこんだ。正午が近づくにつれて太陽がトラックの影にくいこんできた。

スナックではトラック運転手が勘定を払い、おつりの五セント玉二箇をスロット・マシンに入れた。シリンドーが猛烈な勢いで回転したが、当りは出なかった。「ちつとももうからねえように造つてやがる」と男はウェイトレスに言った。

女は答えた。「二時間にもならない前に大当りした人がいたわ。三百八十ドルもうけたのよ。あんたいつもどつてくるつもり？」

男は網戸を少し開きかけたまま立っていた。「一週間か十日してからよ。タルサ（オクラホマ州東北部の都市）までひとつ走りしてこなくちゃならねえ。いつでも思ったほど早くはもどれねえからな」

女が不機嫌そうに言った。「蠅を中に入れないでよ。」

出るかはいるか、どっちかにしてよ」

「あばよ」と男は言つて、戸をぐいと押して外に出た。網戸はうしろにボタンとしまつた。男は日なたにつつ立って、ガムの包み紙をむいた。肩幅が広く、腹に厚みがある、ずっしりと重そうな男である。赤ら顔で、青い日はいつも強い光線を細めて見る癖で、細く切れ長である。軍隊ズボンと編上げの長靴をはいていた。唇のところにガムを持っていきながら、男は網戸ごしに声をかけた。

「おい、おれに聞かれたくないようなことをしちゃあだめだぞ」ウェイトレスはうしろの壁の鏡のほうを向いたままであつた。彼女が何やら口の中で言うのが聞こえた。トラックの運転手は、ひと噛みごとに顎と唇を広く開けながら、ゆっくりとガムを噛みこなした。真赤な大型トラックまで歩いていく間に、口の中でガムをほどよくまろめ、舌の裏側にころがしこんだ。

便乗客が立ち上がって、窓を透かしてこちらを見た。便乗客が立ち上がって、窓を透かしてこちらを見た。便乗客が立ち上がって、窓を透かしてこちらを見た。

「大将、おれをのせていってくれないかね」
運転手は一瞬、スナックのほうをふりかえつた。「おめえ、『便乗おことわり』のはり札が見えねえのかい？」
「そりゃあ見たともよ。だけど、たとえどっかの金持野郎にはり札を無理に出させられようが、いい人間が時にはいいないわけでもなからうからね」

運転手はゆっくりとトラックに乗りこみながら、相手

の答えのカン所について思いかえしてみた。もし今拒絶するとすれば、いい人間でなくなるだけでなく、はり紙を最後までつけていなければならなくなり、そのうえ、話し相手をもつことも許されぬことになる。もしこのヒッチ・ハイカーを入れてやるとすれば、自動的がいい人間になれるのだし、それに、どここの馬の骨やら知れぬ金持野郎に顎で使いまわされる恐れのない人間にもなれるというものだ。畏にかけられていることは自分でもわかつていたが、逃げ道は見つからなかつた。そのうえいい人間になりたかつたのである。彼はもう一度スナックのほうをちらりと見た。「角をまがるまでステップの上にはやがんでな」と彼は言つた。

ヒッチ・ハイカーは見つからないようにべたりと身を落として、ドアの把手にしがみついた。モーターが一瞬間なり音をたて、ギヤがカチリとかかり、大型トラックは動き出した、第一ギヤ……第二ギヤ……第三ギヤ、次には泣きたてるような急加速、そして最後に第四ギヤ……。しがみついている男の下ではハイウェイが、ぼやけながら、目のくらむような速さで通りすぎた。最初の曲り角までは一マイルあって、そこでトラックはスピードをゆるめた。ヒッチ・ハイカーは立ち上がって、ドアをゆっくり開け、シートにもぐりこんだ。運転手は目を細めながら男のほうを見やった、それからゆっくりとガ

ムを噛むのだったが、そのようすはまるで、頭脳の中に最終的に部類別けする前に、思想や印象が顎によって分類され整理されているみたいであった。彼の目は客の新

品の鳥打帽から始まり、新品の服を下にさがって新品の靴にまで及んだ。ヒッチ・ハイカーは背中をシートにもぞもぞこすりつけて楽な姿勢に落ち着き、それから鳥打帽をぬいで、汗ばんだひたいとおとがいをそれでふいた。「ありがとう、兄弟」と彼は言った。「足がまいっちゃったんでね」

「新しい靴だな」と運転手は言った。彼の声には目と同じような秘密らしさとあてこすりのようすがあった。「新しい靴で歩いたりしちゃいけねえよ——暑い頃にはな」

ヒッチ・ハイカーはほこりをかぶって黄色くなった靴を見下ろした。「ほかに靴がなかったんだ。ほかのがなければ、こいつでもはかなきゃならんさ」

運転手はいかにもさとりが良さそうに、前方を細目で見やうから、トラクタのスピードをいくらか上げた。

「遠くまで行くのかい？」

「う、うん。足がまいっちゃまわなけりゃ、歩いたところだ」

運転手の質問には、精巧な尋問の調子があった。まるで網でもひろげているみたいに、言いかえれば、質問で

罟をかけているみたいにみえた。「仕事探してるんかい？」と彼はたずねた。

「いや、おやじが農地をもってるんだ、四十エイカーだ。小作人だが、うちではずいぶん昔からあそこにいるんだ」

運転手は道路沿いの畑を意味ありげに見やった。そこではとうもろこしは横倒しになり、土ぼこりがその上に一面につもっていた。小さな火打ち石がほこりまみれの土の中からいくつか突き出ている。運転手は、まるで独り言でもするみたいに言った。「四十エイカーの小作人なのに、まだ砂あらしにも逃げ出さないし、トラクターにも追いつかれないって言うんかい？」

「もちろん、近ごろ便りはなかったんだが」とヒッチ・ハイカーが言った。

「昔からか！」と運転手が言った。蜜蜂が一匹、運転席の中に飛びこんできて、風防ガラスの後ろでぶんぶん唸り音を立てた。運転手は手をのぼして、注意深く風の流れの中に吹きとばした。「今じゃ小作人がどんどんいなくなっているんだ」と彼は言った。「一台のキャタピラで十家族の人間を追いつちまうんだ。今じゃどこへ行ったらってキャタピラだらけよ。あばれこんできて、小作人を追い出しちまうんだ。おめえのおやじさん、どうやって頑張ってるんだい？」舌と顎が忘れていたガム相手



に再び忙しそうに動き出し、それをひっくりかえしたり、噛んだりした。口が開くごとに、舌がガムをくるりと裏返すのが見えた。

「うん、近ごろは便りがないんだ。おれやあ昔から筆まめだったためしはなかったんだし、おやじもおんなじだったからね」彼はすぐこうつけ加えた。「だけど、こっちも書こうと思えば、書けるんだ」

「働いていたんかい？」また例の秘密めいた、さぐるようななげなさである。遠くの畑のかなた、かすかにきらめく大地を見やっておいてから、ガムを邪魔にならない頬の裏側に収めこむと、窓からつばをベッと吐いた。

「そうとも」とヒッチ・ハイカーが言った。

「だろうと思った。おめえの手を見たからな。つるはしか、斧か、大ハンマーでも振りまわしてたんだろう。あれをやると手がてらになってくる。おれはそういうことには何でもすぐ気がつくたちだ。自慢にもしてるくらいなんだ」

ヒッチ・ハイカーはじろりと相手をにらんだ。トラックのタイヤは足もとでブーンと唸りをたてていた。「ほかにまだまだ聞きたいことがあるってのかい？ よければ言ってみようぜ。かんぐるまでもないことだ」

「おいおい、腹を立てなさんなよ、おせっかいをするつもりじゃなかったんだ」

「何だって教えてやるよ。何も隠しだてなんかしちゃいないんだ」

「おいおい、腹を立てちゃいけない。おれはただ、いろんなことを気をつけて見るのが好きただけなんだ。それでひまつぶしているんだよ」

「何だって教えてやるさ。名前はジョードだ、トム・ジョードだ。おやじはトム・ジョードじじいだ」彼の目は物思わしげに相手を見すえていた。

「腹を立てちゃいけない。悪気はちっともなかったんだから」

「おれだって悪気はないさ」とジョードが言った。「ほかの人間をこづきまわしたりしないで暮らしていこうとしているだけなんだ」ここでぶつ切り言葉を切ると、乾ききった畑や、熱気にかすむはるかかなたに不安げにうなだれている枯れきった木立ちのほうに目をやった。脇ポケットからタバコと巻き紙を取りだすと、風にひっさらわれない膝の間で、それを巻きにかかった。

運転手はまるで牝牛みたいにリズムにのり、考え考えしながら噛んでいた。さっきのやりとりの激しい調子が、すっかり消え去り、忘れられてしまうのを待っていたのである。ようやく、あたりの空気が中和状態にもどったのを見てとると、こう言った。「トラックの運ちゃんやつたことのねえものにやあ、これがどんな商売か見当も